

撰者不詳『撰大乘論無性釈』への注釈書断簡(2)

—養鷗徹定旧蔵『華嚴経疏』の実態：顧文彬旧蔵断簡—

佐 藤 厚*

<目次>

- 1 問題の所在
- 2 断簡と伝来の経緯
- 3 翻刻
- 4 『撰大乘論無性釈』との対照
- 5 結語

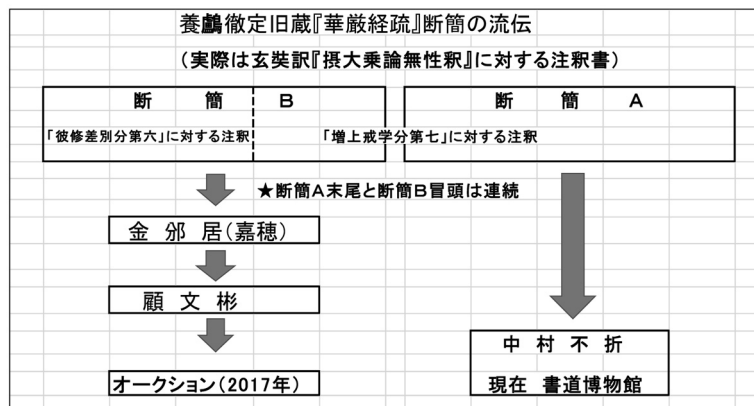
<要約文>

筆者は前稿で、書道博物館（東京）に収蔵される養鷗徹定旧蔵の『華嚴経疏』断簡（図・断簡 A）が、実際には玄奘訳『撰大乘論無性釈』に対する注釈書であることを明らかにした。2017年、中国のオークションで清末の書画収集家・顧文彬旧蔵の『続華嚴経疏』断簡（図・断簡 B）が、日本円にして約3億円で落札されたが、この断簡も本来は養鷗徹定の旧蔵本である。その内容を検討してみると、これも玄奘訳『撰大乘論無性釈』に対する注釈であり、さらに書道博物館所蔵断簡の連れ本であることが判明した。すなわち養鷗徹定が『華嚴経疏』とされる断簡の最初の所有者であり、一部が書道博物館に収蔵され、一部が養鷗と交友のあった中国人の金邨居（嘉穂）を経て顧文彬に渡ったということである。本稿はこの顧文彬旧蔵断簡についての研究である。

この断簡の内容は前半と後半とで異なる。前半部は書道博物館所蔵断簡に続く「増上戒学分第七」に対する注釈であるが、後半部は一つ前の「彼修差別分第六」に対す

*専修大学ネットワーク情報学部特任教授

る注釈である。これは卷子本を作る時に生じた錯簡によるものと考えられる。本研究の意義は、第一に、現伝していなかった『無性釈』に対する注釈書が、断簡ではあるが発見されたことであり、第二に、研究の進展により、中国唐代の仏教、特に撰論学派、唯識学派の研究に貢献する可能性があることである。



キーワード：『華嚴経疏』，玄奘訳『摂大乘論無性釈』，養鷗徹定，金嘉穂，顧文彬，

1 問題の所在一約3億円で落札された古写経

2017年夏、中国で行われたオークションで、ある古写経の断簡が1794万元、日本円にして約3億円で落札された。中国の経済系の新聞『中国商报』は次のように伝える¹。

近年、唐人写経がオークションに出品されるようになってきているが、その度にコレクターの注目の的になっている。先日行われた中貿聖佳の春季オークションでは、過雲楼旧蔵の唐人写経が競合の末、ついに1794万元もの高値で取引された。

唐人写経とは唐代の写経という意味である。また過雲楼とは、清末の著名な書画収集家・顧文彬（1811-1889）が蘇州に造った建物で、そこには有名な書画が多数保存されていた。すなわち顧文彬旧蔵の唐代の写経が1794

万元（日本円で約3億円）もの値で取引されたということである。報道によれば、写経の内容は『続華嚴経疏』の「十回向品」から「阿僧祇品」までであるという。そしてこれが日本の養鷗徹定（1814-1891）から中国の金邨居（嘉穂，1834-?）に伝えられ、そして顧文彬に伝わったものであるという。

この写経（以下、本断簡）はオークション業者である中貿聖佳のカatalogに写真が掲載されており見ることができる。報道では本断簡を『続華嚴経疏』とするが、筆者が内容を解読した結果、それは『華嚴経』の注釈書ではなく玄奘訳『撰大乘論無性積』に対する注釈書であることがわかった。ここで最近の筆者の研究につながる。筆者は前稿で書道博物館に収蔵される養鷗徹定旧蔵『華嚴経疏』断簡が、実際には『華嚴経』の注釈書ではなく、玄奘訳『撰大乘論無性積』に対する注釈書であることを明らかにした²。そして、いま紹介した顧文彬旧蔵の断簡は、書道博物館所蔵断簡に連続する断簡、いわゆる連れ本であることがわかったのである。

以下、本稿では、断簡と伝来の経緯について検討し、断簡の翻刻を行い、『撰大乘論無性積』との対応を示す。本研究の意義は、第一に、現伝していなかった『無性積』の注釈書のテキストが、断簡ではあるが発見されたことであり、第二に、研究の進展により、中国唐代の仏教、特に撰論学派、唯識学派の研究に貢献する可能性があることである。

2 断簡と伝来の経緯

2-1 断簡について

本断簡の実物は見ることはできないが、写真版が『中貿聖佳2017 春季芸術品拍卖会』カatalog（ホームページ www.zmsj.cc からダウンロード可能）に掲載されている。筆者はこれをもとに構成図を作成した<図1>。1-1と1-2は表面の右と左、2-1と2-2は裏面の右と左である。

<図1> 『華嚴經疏』断簡 構成図（中賀聖佳のカatalogをもとに作図）

1-1（表・右側）

----- B 本文 ----- | A 見返



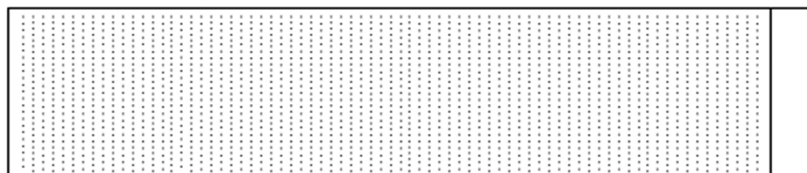
1-2（表・左側）

| ----- D 金部居の跋 ----- | C--徹定の跋-- | ----- B 本文 ----- |



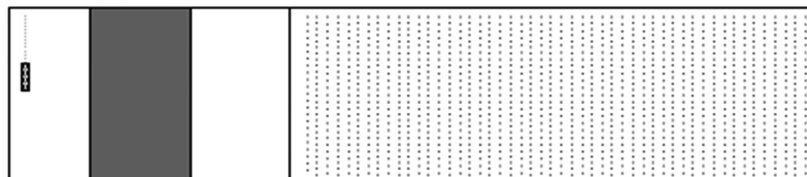
2-1（裏・右側）

| ----- E 紙背（『五教章』） ----- |



2-2（裏・左側）

| ----- F 表紙 ----- | ----- E 紙背（『五教章』） ----- |



本断簡は卷子本で奥書は存在しない。2-2 F表紙の左端に題箋があり、見づらいが「続華嚴經疏」と読める。カatalogによれば、法量は縦250ミ

り、横1640ミリであるという³。界線がある。

表側を見ると、最初に本文が111行記される(1-1, 2B)。これは1行あたり23文字から25文字で、文字数の合計は約2500文字である。続いて徹定の跋(1-2C)が10行あり、それに続いて金邠居の跋が39行記される(1-2D)。紙背(2-1, 2-2E)には、表面とは異筆で法蔵『五教章』が約80行にわたり記される⁴。

本断簡の題箋に「続華嚴経疏」とあることから、徹定は『華嚴経』の注釈書と判断したものと思われるが、これが最初から付いていたものか不審である。後に検討するように、本文は文の途中から始まっている。筆者は写本に通じていないのでわからないが、卷子本の冒頭は区切りの良い部分から始まるのが普通ではないだろうか。このように文の途中から始まるということは、この題箋を含めた表紙の部分が後から断簡に付された可能性が考えられる。それを徹定が行ったのか、徹定以前からそうになっていたのかはわからない。

2-2 伝来経緯

続いて本断簡の伝来経緯について、所蔵者の順に、養鷗徹定、金邠居、顧文彬の跋文を見て行くことにする。いずれも現代語訳で示し、原文は注に記した。現代語訳に際して補助的に用いた記号は、[補充]、(原語)、「引用」、〈説明〉である。

(1) 養鷗徹定

本断簡の最初の所蔵者は養鷗徹定(以下、徹定)である。徹定は浄土宗の僧侶であると同時に、日本伝来の古写経の収集に努めた人物である⁵。その跋には次のようにある⁶。

花嚴経疏零本一卷、唐人の無名氏の書である。筆法はまことにすばらしく(秀拔)、

精奇入神の作といえ、頗る二王（王羲之父子）の風がある。弘法大師の『請来目録』を調べてみると『新訳花嚴經』及び『花嚴疏』、『花嚴十会』、『花嚴会名図』、『請賢聖文』等数部⁷とある。また『性靈集』を調べてみると「大師が唐におられた日、越州の節度使に請い、広く内外の典籍を求めた」⁸とある。ここから考えると、この疏は大師が将来したものの一つで、彼の土の名匠の手沢であることがわかる。

万延二年（1861）辛酉仲夏、仏眼山竺徹定識す。

徹定はこれを『花嚴經疏』であり唐時代の人物の無名人の書であるとする。そして筆法のすばらしさとそれが王羲之の書風に似ることを述べる。続いて伝来についての考証に入り、弘法大師空海の『請来目録』に『新訳花嚴經』と『花嚴疏』があることを指摘する。さらに『性靈集』に空海が在唐時に越州節度使に要請して多くの典籍を求めたことを挙げ、それにより本断簡が空海将来本であると結論付ける。この跋は前稿で扱った書道博物館所蔵の『華嚴經疏』断簡とほぼ同じものである⁹。

（2）金邠居（金嘉穗）

金邠居（金嘉穗、1834-?）は中国の文人で、徹定と明治3年末から明治4年の初めにかけて交流があった。徹定と金嘉穗の筆談記録を記した『瓊浦筆談』という資料があり、町泉寿郎が研究を行っている¹⁰。それによれば、金嘉穗は、道光14年（1834）蘇州に生まれ、名は嘉穗、字は幽懷・邠、別号に庵・闇・芷園・尊古自牧・邠居・曹門・主客説詩堂等がある。書画・金石学に通じた。太平天国の乱を避け、妻を蘇州に残して、新興の経済都市上海に住んで書画によって生計を立てた、いわゆる海上派文人と目すべき人物である。徹定との具体的な交流と本断簡との関係については跋文を見た後に紹介する。

次に掲げるのが金邠居の跋¹¹の現代語訳である。筆者が段落に記号を付

した。

(A) 華嚴〔経〕は釈蔵〈仏典の叢書〉にあるが二つある。一つは于闐国沙門実叉難陀訳、一つは罽賓国沙門般若訳である。皆な唐の外国の人の経である。李長者〈李通玄〉の疏があり、それを「続疏」と名づけているが、これ〈本断簡のこと〉ではないはずである。これは別の一人の作である。

(B) 首尾はみな欠けている。またこれが『華嚴経』の中の何品を解釈した文なのかはわからない。他日、大蔵経を繕いてみれば自ずからわかるであろう。また疑わしいのは、これが当時〈唐代〉の作者の稿本であるのか、日本に流伝して書写されたものであるのかということである。

(C) 行草は筆意で円勁である。定公〈徹定のこと〉は〔書風が〕二王に似ているというが、その通りである。

(D) また〔定公は〕これを唐の本であるという。すなわち弘法大師が入唐して経を求め請うて帰った本である。証拠は甚だ確実である。

(E) 日本の『倭漢三才図会』には次のように言う¹²。「大師は讃州多度郡、屏風浦の佐伯直田公の男である。母、夢に梵僧が懐に入り十二か月妊娠して宝亀五年に生れた。幼くして六経史伝に通じ、石淵寺の勤操から聞持法を受け、〔学問は〕博く三蔵仏経に涉った。十九歳で剃染し二十歳で落髪し、二十二歳で東大寺で具足戒を受け空海と号した。三十一歳のとき求法のために遣唐使船に乗って入唐した。明年、徳宗皇帝に拝謁し、恵果和尚に会った。恵果はくどうしてこんなに遅く来たんだ>と述べた。留学すること三年にして三十三歳で帰朝し、承和二年に入定した。年は六十二であった。敕して弘法大師の号を贈る。」

(F) また日本撰述の文献である『元亨釈書』には次のように言う¹³。「玄昉僧正、霊亀二年(716)に敕を奉じて入唐し、凡そ二十年、聖武帝の天平七年(735)に帰朝す。舶来した経論疏章五千余卷を尚書省に献ず」。

(G) また日本新刊の『倭漢年契』に「宝亀五年(774)は唐の大暦九年(774)」¹⁴とある。〔空海が〕三十一歳で入唐したならば貞元二十年(804)である。また〔玄

昉が入唐した] 霊龜二年（716）は開元四年（716）に当り、天平七年（735）までは二十三年である。

(H) 定公はこの書物を元昉のものとはせず、空海のものとしている。思うに華嚴はやや後に出、そして疏はさらに後になる。そして空海の時に始めて流布するようになったのであろう。

(I) また定公新撰の『訳場列位』の「華嚴」に、「実又難陀本は則天武後の証聖元年（695）に訳された。『新華嚴』般若本は貞元十一年（795）に訳され、十四年（798）に畢り、進上した」¹⁵とある。

(J) 今、疏（注釈書）がいつ造られたかは詳しくはわからないが、大体のことはわかる。空海の『請来目録』に、已に「新華嚴并疏」とあるのはこれのことである。〔定公の〕跋に『請来目録』並びに『性霊集』を挙げているが、〔これらは〕日本の著述であるので、〔私は〕今は皆な未見である。

(K) 万延二年（1861）辛酉は皇朝の咸豐十年である。是の年は即ち文久元年に改められる。故に『年契』には万延二年は無い。

(L) 徹定は日本の僧侶である。字は松翁で、学は儒教、仏教に通じている。私は以前、その人の事を知り、定公と呼んでいる。すばらしいことに〔この人は〕今日の賛寧（北宋代の仏教史家）、惟浄（北宋代の仏教史家）の一流で著作がとても多い。刊行書は数種あり、『古経題跋』（1869）、『訳場列位』（1863）、『釈教正謬初破再破』（1873）などがある。

(M) 〔彼が〕所蔵する古経は夥しい数である。その中で最も神品無上とするものは、一つは唐の咸亨四年（673）、章武郡公蘇慶節為父邢国公定方写造の『大楞炭経』である。白麻紙は新の如く、墨濃は漆の如く、細楷で精妙である。一つは西魏の大統十六年（550）、陶作虎写造の『菩薩処胎経』で末尾に願文を附している。麻紙（南北朝の紙には元から名前は無い。今、この経紙は唐と相似しており愈古い。遂に趙松雪（子昂）の跋洛神を引いて云う、晋の時の麻箋の例を麻紙という）で、精古の作であり老黄色である。字の大きさは豆の如くである。書法は真に逼ったものである。北碑の一派ではあるが筆意は自から如であり、石刻の方拙の如き

スタイルではない。いわゆる北朝のスタイル(毡裘気)ではあるが、その超越し聖なる世界に入っている処は、実に不可思議の妙がある。

(N) 私はかつてこれらに題跋を付した。見た古写本は十数種に近い。故に定公は、この巻と福田経の餉で潤筆している。西魏の墨迹は世間絶無の宝である。図らずして東夷(日本)に今も存在していることは今、述べた通りである。自ら購入し所蔵している人がこれに続き、これらの巻物を見せてあげれば、世に北朝の真迹があることを知らせることになる。なんと愉快無極ではなからうか。

同治十一年壬申(1872年)十二月 邵居金嘉采 記す。 印 印

段落ごとに整理すると次のようになる。(A) では『華嚴経』の翻訳に実叉難陀訳と般若訳の二本があること。また注釈として「続疏」と名けた李通玄のものがあるが本断簡とは異なり、本断簡は別人のものであるとする。(B) では本断簡の首尾が欠けていること。よって『華嚴経』のどの部分の注釈かは不明であること。さらにこれが中国で制作されたものか、日本人が書写したものかは不明であることを述べる。(C) 書体について徹定が王羲之父子の書風であると述べたことについて、その見解を認めている。(D) 以下では、徹定が本断簡を空海将来本であると述べたことが確実であるとする。続いて(E) では『倭漢三才図会』の空海の伝記を引用する。また(F) では『元亨釈書』を引用し、奈良時代の玄昉が経論を将来したことを述べる。そして(G) では日本と中国の年号の対照を整理した『倭漢年契』をもとに年号を調べている。(H) そして徹定が玄昉将来本ではなく空海のものとする述べる。(I) 徹定の『訳場列位』を挙げ、実叉難陀本と般若本との訳出年代を出す。(J) 結論として徹定と同じく、空海請来本であることを認める。(L) 以下は徹定の紹介である。彼が博識で、中国宋代の賛寧、惟浄に匹敵すること。そして徹定の著作を挙げる。(M) では徹定所蔵の古経について述べ、中でも『大楼炭経』、『菩薩処胎経』が逸品であることを述べる。そして(N) 自分が徹定所蔵の古経に題

跋を付したこと。そしてそれらのすばらしさを述べる。

以上、金邠居は徹定の見解、すなわち空海が将来した『華嚴経疏』であることを認めている。ここで問題点をいくつか挙げる。一つは、(B)で本断簡が首尾欠けていることから何品の注釈かは不明であると述べているにもかかわらず、これを『華嚴経』の注釈とすることは疑っていないことである。これは徹定の見解を信頼してそのまま踏襲したものと考えられる。また、もし本断簡を『華嚴経疏』と見たとして、これが実叉難陀本と般若本とのどちらの注釈と見ているかが明確ではない。これは空海のいう新華嚴疏がどちらを指すのかという問題であるが、この部分が明確ではない。

さて、(M)、(N)では金邠居と徹定との交流の様子が説かれるが、前述した町泉寿郎の論文により両者の交流を整理すると次のようになる。金邠居は明治3年頃、赤松某とともに長崎に来舶し、明治4年正月下旬に名古屋藩の招聘に応じ、翌5年3月頃まで同藩士に教授したという¹⁶。

一方、徹定は明治3年9月から11月にかけて周防の浄土宗学校において都講を勤め、12月に長崎大音寺で「華嚴原人論」と契嵩「輔教編」を講じ、その余暇に偶々同地に滞在中の金嘉穂と出会って詩文を唱和し、それを筆談録二巻にまとめたという¹⁷。両者の初対面は明治3年12月28日、徹定が金嘉穂のもとを訪問し耶蘇教に対する議論を行ったことが始まりである。ここで金嘉穂の学問識見を信頼した徹定は、自分が所有する古写経を金嘉穂に示して跋を請うた。再見時（明治4年正月3日）は、金嘉穂が徹定を訪うた¹⁸。その後は書翰による応答が行われた。4日の徹定の書翰では、初めて秘蔵の古写経を鑑賞してくれる人物に巡り会ったことへの感謝が述べられ、更に日本の古写経五卷（『心経』『華嚴経』『時非時経』『続華嚴経疏』）を送寄して跋を請うた¹⁹。正月15日には互いに書翰と跋文を交換した。徹定は「書元契翻訳名義集後」を贈り、金嘉穂は「心経（跋）」「華嚴経跋」「時非時経跋」「続華嚴経疏跋」，「元契梵本翻訳名義集（跋）」を贈った²⁰。

さて、この中に「続華嚴經疏」,「続華嚴經疏跋」が出て来る。当初筆者は、これが本断簡を指すものと考えたが、そうではなかった。『瓊浦筆談』の中に金嘉穂が撰した「続華嚴經疏跋」が収録されているが、それは今見た本断簡の跋とは一致しないのである²¹。ここから本断簡とは別に「続華嚴經疏」が存在していた可能性が考えられる。

(3) 顧文彬

顧文彬(1811-1889)は、字は蔚如で号は子山。晩年には良盦と号した。過雲樓の主である。元和(現在の江蘇省蘇州)の人。道光二十一年(1841年)の進士で刑部主事を授かったのを始め地方の官職を歴任した。幼時から書画を愛し、後に収集を始めた。著作に『眉録樓詞』八卷、『過雲樓書画記』十卷、『過雲樓帖』がある。1873年に蘇州に過雲樓を建て、数多くの書画を収蔵した。また怡園を築造し、蘇州の文化活動の中心を作った。過雲樓の蔵書の素晴らしさは、「江南の収蔵は天下で一番であり、過雲樓の収蔵は江南で一番である」とうたわれたほどである²²。1990年代初め、過雲樓所蔵の蔵書の四分の三が南京図書館に収められ、残りの179部500冊が2005年にオークションにかけられた。2012年春のオークションでは鳳凰出版が2162億元(約3兆6850億円)で落札した。なお、金邠居との関係については、金が鵜飼に対して、友人として顧文彬を挙げている²³。

顧文彬の本断簡に対する記述は、彼の『過雲樓書画記』巻一に「唐写続花嚴經疏卷」という題目で記されている²⁴。現代語訳で示す。

唐写続花嚴經疏卷

(A) 唐時代の写本『続花嚴經疏』の残本である。文は「釈十回向品」から「阿僧祇品」に当る。

(B) 私は同郡の金君芷彬〈金嘉穂の号〉からこれを得た。金君は日本に遊び、仏眼山の僧・徹定からこれを得た。

(C) 徹定はこれを唐本であると言い、弘法大師の『請来目録』の新訳『花嚴経』及び『花嚴疏』を引く。また『性霊集』の「大師在唐の時、越州節度使に請うて広く内外の典籍を求めた」を証拠としている。

(D) さらに金君は『倭漢三才図会』に「大師は讃州多度郡、屏風浦の佐伯直田公の男である。母、夢に梵僧が懐に入り十二か月妊娠して宝亀五年に生れた。幼くして六経史伝に通じ、石淵寺の勤操から聞持法を受け、博く三蔵仏経を涉った。十九歳で剃染し二十歳で落髮し、二十二歳で東大寺で具足戒を受け空海と号した。三十一歳のとき求法のために遣唐使船に乗って入唐した。明年徳宗皇帝に拝謁し、恵果和尚に会った。恵果はくどうしてこんなに遅く来たんだ>と述べた。留学すること三年にして三十三歳で帰朝し、承和二年に入定した。年は六十二であった。敕して弘法大師の号を贈る。」を引用する。『倭漢年契』には「宝亀五年（774）は唐の大暦九年（774）」とある。〔空海が〕三十一歳で入唐したならば貞元二十年（804）である。また〔玄昉が入唐した〕靈龜二年（716）は開元四年（716）に当り、天平七年（735）までは二十三年である。また定公は新撰の『訳場列位』の「華嚴」に、「実叉難陀本〈八十卷華嚴〉は天后証聖元年（695）に訳された。『新華嚴』般若本〈四十卷華嚴〉は貞元十一年（795）に訳され、十四年（798）に畢り、進上した」とある。今、疏〈注釈書〉がいつ造られたかは詳しくはわからないが、大体のことはわかる。空海の『請来目録』に、已に「新華嚴并疏」とあるのはこれのことである。

(E) 私が考えるに、金君と徹定が考定した『続花嚴経疏』は、唐の時代に中国から日本に請われて行ったものである。今、〔この写本が〕日本から中国に帰って来て、今日の中国において唐代の卷子本の制度を見ることが出来るのが善いことの一つ目。唐代の仏教典籍が、注釈だけが独立し、經典と別に流布していたことがわかることが善いことの二つ目。また唐代の澄観の『花嚴経疏鈔会本』二百二十卷が『大蔵経』の中にある²⁵。今、経生²⁶の写本を得たので、その同異を比べてみることができることが善いことの三つ目である。

(F) 書法は円勁にして古厚であるが、右軍（王羲之）大令（王献之）の子孫（血

胤)〔である我々〕がこれを見ることが出来なかった。すなわち、この疏は我が中国の瑰宝である。日本に入って千余年になるが、一旦来帰したことは歓喜無量である。どうして残本を少ないと言おうか。

段落ごとに整理すると次のようになる。(A) 唐時代の写本『続花嚴経疏』の残本であり、内容が「釈十回向品」から「阿僧祇品」に当ることを記す。(B) では、徹定から金邠居へ。金邠居から顧文彬へという伝来の経路を記す。(C) では、徹定の跋にあった空海請來說の証拠を挙げる。(D) では、金邠居の跋にあった『倭漢三才図会』、『倭漢年契』、『訳場列位』の証拠を挙げる。(E) では、顧文彬が以上の証拠が信頼するに足るものであるとし、続いて本断簡の意義として、1 当時の卷子本の制度を見ることが出来る。2 当時の注釈が経典とは別に流布していたことがわかる。3 澄観の『花嚴経疏鈔会本』との比較ができる、という三つを良い点として挙げる。(F) 最後に書法のすばらしさを挙げ、我が中国の瑰宝であると述べている。

ここで注意されるのは (A) の「釈十回向品」から「阿僧祇品」に当るという言葉である。この指摘はそれ以前にはなかったものであり、何を根拠としたものか不明である。推測するならば、これは金邠居から得た情報であろう。さらに金邠居も自分でこれを判断したとは思えないので、最初の所蔵者であった徹定が伝えたと考えるのが自然である。この問題は現段階ではよくわからないが、前述した金嘉穂が跋文を付した『続華嚴経疏』と何らかの関係があると思われる。

次節以後では、本断簡が実際は玄奘訳『撰大乘論無性釈』に対する注釈であることを明らかにする。

3 翻刻

ここでは『中賀聖佳 2017 春季芸術品拍卖会』カタログに収録された写真をもとに、本断簡を翻刻する。翻刻に際しての凡例は次の通りである。

- ・本来は縦書きであるが横書きにした
- ・一番左側に行番号をアラビア数字で附した。
- ・翻刻に際して漢字は新字にした。
- ・略字なども現在通用する文字で統一した。
- ・判読不明字は■で表した。

- 1 善趣定往惡趣如是知已生如是心我作此業當墮惡趣我
- 2 寧自往必當脫彼於彼現在雖加少苦令彼未來多受安樂
- 3 是故菩薩譬如良醫以饒益心雖復殺之而無少罪多生其
- 4 福由多福故疾証無上正等菩提如是等戒最為甚深問何
- 5 故此中示作無間恐作故然涅槃經中仙与国王待婆羅門謗
- 6 方等已然後行然答諸師釈云五無間業是定業障一切受
- 7 苦由可一不救所以未作即使行然謗經云罪是不定業若捨
- 8 惡覺即不受報知婆羅門命終之後初生起念即捨惡覺
- 9 生善處故從彼謗已然後斷命或有釈云此論拋衆生不由
- 10 受苦方起善心先有善故所以未作即便斷命乘光勝善
- 11 得生善道彼涅槃經拋衆生要由處苦方能起善又先無
- 12 勝善可生善道所以從彼作已方然皆由菩薩善知識故如
- 13 是不同二不相違得説言謗經云業是不定業可救故尔若
- 14 依大乘謗方等經乃重五逆何得説言五逆不可釈謗經可救
- 15 邪今存後釈言行殺生等十種者下三義釈初約相似次■
- 16 大數後就實行初言謂諸受樂善法者似貪欲■言增惡

- 17 不善如似嗔恚言見諸邪性見邪是邪名因邪見此三善心即
- 18 是後三言依正此故行然等七者依此善心行前七業無罪有
- 19 福二或行前七不起後三者此約大数以釈実唯有七是十中
- 20 数故総言十二或已伏除等者約実行釈問為起実貪嗔等
- 21 応是性罪云何無罪答由先悲恵引此貪嗔但除邪見雖
- 22 復現行発身語業不名為罪是故釈言不能受苦故無有
- 23 罪能助道故生無量福此義如彼深密經說於諸地中所生
- 24 煩惱当知何相何失何得善男子無染行相何以故是諸苦
- 25 薩於初地中定於一切諸法々界已善通達由此因縁菩薩要知
- 26 方起煩惱非為不知是故說名無染行相於自身中不於生苦
- 27 故無過失菩薩生起如是煩惱於有情界能斷苦因故
- 28 彼經論皆言若從先來善後力等数習所成名習種姓若
- 29 仁王經及瓔珞經唯就瑜伽論等習種姓中初修習者名習
- 30 種姓因習成性後修者名性種姓道種姓此諸經論挹義
- 31 有異立二種姓先後不同位地差別理並無違諸師或云從十
- 32 廻向即入初地或有說言依莊嚴論十廻向後更事諸仏修決
- 33 択善発方入地今依後釈十廻向滿未入初地別修決択後方入
- 34 地三釈妨難者問准依梁論願樂行人經第一阿僧祇修行
- 35 円滿又云願樂行人自有四種謂十信十行十廻若准彼
- 36 文十廻向滿尽初僧祇其四善根既廻向後以此文証, 四種
- 37 菩提是第二僧祇何故前判乃云初劫答准依梁論修時章說
- 38 其四善根配三十以故彼論云菩薩道前有四方便謂十信等
- 39 如須陀洹道前有四方便所謂煖等又准彼文釈願樂行人此人
- 40 未得名清淨意行人猶既如世第一法, 既挙小乘世第一法喻願行
- 41 人故知大乘世第一法是願行■又云無分別智即是清淨意行
- 42 是第二劫其四善根既非無分別智故知非是第二僧祇言得淨
- 43 意樂勤修諸行者得出世間無分別智相應意樂依此意樂

44 ■修諸行名清淨意行此通十地言此在六地名有相行在第
 45 七地名無相行若此前清淨行人在六地已還由出觀時遍計猶■
 46 名為有相第七地中雖復出觀所執不觀名為無相言如是二
 47 種經第二劫者由淨意樂是其通人今但別有相無相二種
 48 經第二劫修行円満言已上乃至第十地中即此轉名無功用行
 49 者即此清淨意樂行人至八地已上轉前有相無相（*数文字不詳）
 50 功用行經第三劫修行円満言第八地中無功用行（*数文字不詳）
 51 地已得無功用行猶未成満言第九地第十地行方（*数文字不詳）
 52 因行究竟此行妨満三此唯是一等者重明人云一異之相下拳
 53 喩顕言如預流等者等二學果如小乘中依此三果建立五人故
 54 梁論云如須陀■陀含阿那含三位互得制立為五人説初
 55 方便至須陀洹為第一家為第二斯陀含為第三一種（*数文字不詳）
 56 阿那為第五菩薩位亦尔説初方便至初地為第一位從二地至
 57 七地是第二位從八地至第十地為第三位亦得制立為五人説初
 58 方便至初地為第一位從二地至四地為第二位五地六地為第三
 59 位七地為第四八地至十地為第五位良以大乘初位摂前後位摂後
 60 中摂前後是故五人三位可摂今但於此第二位中分作三人前離
 61 出家々後雖出種子故成五人但由大小三五是同故引為喩而
 62 非一切四別釈頌先門言從無始來等者若論虚時無始已來
 63 即無分齊若約其行何相是初言為答此等者対問彰頌釈
 64 与下釈頌文亦有解言若依梁論有其四力謂根力善願力
 65 心堅力以進力依此論中但有三力今依此論具有四力亦無■■
 66 先釈上兩句明其四力依瓔珞經十信心此四並摂初善根力
 67 者以念空惠三心為体二大願力者即是願以及廻向心二心為体
 68 能降伏所治者顕善根力有治障用常值善知識者顕大
 69 願力有摂善用三堅固心者謂信心護心法及戒心三心為体即
 70 是初善根力所成故云雖過惠發方便破壊終不棄捨大菩

- 71 提心四■進者即是精進心及不退心二心為体是故釈言現世
- 72 当来所修善法運々增長終無退減此十信位依諸經論或有
- 73 說退或說無退余師会釈略以四門分別一序退二序不退三定
- 74 其所立会釈相違四釈妨難初說退有二文一梁論第十勝相
- 75 云菩薩在十信位中修大行未堅固多厭怖生死慈悲衆生心
- 76 猶劣薄喜欲捨大乘本願修小乘道故言欲偏行別乘二依
- 77 瓔珞經云諸善男子若一劫二劫乃至十劫修行十信得入十住是
- 78 人尔時從初一住至第六住諸仏菩薩善知識所護故出到第七
- 79 住常住不退自在七住已前名為退分如淨目天子法財王舍利
- 80 弗等欲入第七住值惡因縁故退入凡夫不善惡中不名習種聖人
- 81 二修不退有四文一此論云堅固心昇進者雖遇惡友方便破壞
- 82 終不棄捨大菩提心現世当来所修善法運々運增長終無退減
- 83 此論意明十信即為僧祇云始即得不退二起行論明十信名信成
- 84 就発心云修行信心經一万劫信心成就故入正定聚畢竟不退
- 85 名住如来種中正因相應未經一万劫遇惡因縁或便退失墮二
- 86 乘地如後人王經言十千劫行十正道乃当得入習忍位同起信論
- 87 修行信心經一万劫信心成就以十劫是一万劫故三仁王經上卷明
- 88 十信中云習種性十心一切諸仏菩薩長養十心為聖胎下卷中明
- 89 十信為習忍云善男子習忍已前行十善菩薩有退有進譬如
- 90 輕毛随風東西是諸菩薩亦復如是雖以十千劫行十正道発
- 91 三菩提心乃当入習忍位亦常学三伏忍法而不可名字是名
- 92 不定人是定人者入生空位聖人性故必不起五逆等解云十信
- 93 是習種姓故云習忍十信已前行十善菩薩有退有進譬如
- 94 輕毛雖十方劫行十善道当入十信即未得入十住已前仰学
- 95 十信已上三伏忍法以進退不定故不可字名定性菩薩名不
- 96 定人十信已上是定人者学作生空觀故入生空位聖人種姓名
- 97 為聖胎華嚴經明十信偈云若信恭敬清淨增即行堅固不

98 可壊究竟淨心不退轉解云即言不可壊又云不退轉故知十信
 99 不退也三定其所立会釈相違者諸經論中雖有進退皆有正
 100 文今依後四文判十信不退問前云二説当云何通答初梁論説
 101 退者若無諸仏為善知識十信喜欲捨大修小由如來有救濟乘
 102 業故十信不退故仁王經云諸仏菩薩長養十信為聖胎不明十信
 103 有退二瓔珞經云七住已前名為退分如淨因天子等者是方便
 104 説非是實退故起信論云如修多羅中或説十信已上有退墮
 105 惡趣者非其實退位為始菩薩未入正位而懈怠者恐怖勇健
 106 故也諸師云十信行位俱退十解不定若聖人入者如利舍弗第
 107 六心退若凡夫入者初即不退若約凡説十信行位俱退十解已
 108 上行退位不退初地已上行位俱不退今解十信已前行住俱退
 109 故仁王經云習忍以前行十善菩薩有退有進譬如輕毛隨風
 110 東西十信已上行位俱不退故此論云所修善法運々增長終無
 111 退滅四釈妨難者問若十信已上即行位俱不退者必名阿毘

4 『撰大乘論無性釈』との対照

続いて本断簡が玄奘訳『撰大乘論無性釈』に対する注釈書であることを示すために対照表を作成し提示する。内容を解説すると、本断簡は一貫した内容ではなく二つの部分に分かれている。全111行のうち、1行目から27行目までは「増上戒学分第七」への注釈であり、28行目から111行目までは「彼修差別分第六」への注釈である。本断簡の写真版を拡大して見ると、27行目までと28行目からは紙の色が異なっており、これが紙の繋ぎ目であることがわかる。おそらく紙を軸装にするとき錯簡が生じたことが考えられる。

よって、ここでは

(1) 1行から27行：増上戒学分第七への注釈

(2) 28行から111行：彼修差別分第六への注釈

の二つに区分して表を作成した。

作成に際して次のような次のきまりを設けた。

- ・ 一番左側には全体の通番を記した。
- ・ 表の中で用いた略号は次の通り。

1 『撰大乘論』 本文 【撰論】

2 『撰論世親釈』 【世】

3 『撰論無性釈』 【無】

4 『断簡』 【断簡】

・ 略号に【撰論1】，【世1】のように番号を附して，文献ごとの通番とした。

・ 略号，通し番号の次にある数字は，大正藏經31巻の頁数と段である。

・ 『断簡』の中の引用文はカッコを附し，引用対象の引用部分に下線を引いた。引用対象が『撰大乘論』本文，『撰大乘論世親釈』，『撰大乘論無性釈』については注を付けず，引用の終わりの部分に略号【世1】，【無1】で指示した。

・ 『断簡』の最初には注釈対象の名称を示した。続く[]の中の数字は翻刻の行番号である。

・ 『撰大乘論』本文，『撰大乘論世親釈』，『撰大乘論無性釈』以外の出典については注に記した。

(1) 1行から27行：増上戒学分第七への注釈

通番	【撰論1】(426c) 論曰。甚深殊勝者，謂諸菩薩由是品類，方便善巧，行殺生等，十種作業。而無有罪。生無量福，速証無上正等菩提。又諸菩薩，現行變化，身語兩業。應知亦是，甚深尸羅。由此因緣，或作國王，示行種種，惱有情事。安立有情毘奈耶中。又現種種，諸本生事。示行遍惱，諸余有情。真實摂受，諸余有情。先令他心，深生淨信，後轉成熟。是名菩薩所學尸羅甚深殊勝。
1	

2	<p>【世1】(361c) 釈曰。甚深殊勝中，謂諸菩薩由是品類方便善巧者，此中顯示，如是菩薩，如是方便善巧功能。(a)謂諸菩薩，若如是知，如是品類補特伽羅，於此不善無間等事，將起加行。以他心智，了知彼心，無余方便，能轉彼業。如實了知，彼由此業，定退(b)善趣，定往惡趣。如是知己，生如是心，我作此業，當墮惡趣，我寧自往，必當脫彼。於彼現在，雖加少苦，令彼未來，多受安樂。是故菩薩，譬如良医，以繞益心，雖復殺之，而無少罪，多生其福。由多福故，疾証無上正等菩提。如是等戒，最為甚深。又諸菩薩，現起變化，身語二業。當知亦是甚深尸羅。由此道理，或作国王，現作種種，惱有情事。安立有情，毘奈耶中。變化自体，名為變化。此中應說，無厭足王，化導善財童子等事。又現種種，諸本生事者，如毘濕婆安咄羅等，諸本生事。此中菩薩，以其男女，施婆羅門。皆是變化。示行逼惱諸余有情，真受其受，諸余有情者，謂諸菩薩，終不逼惱，余實有情。受其受，實有情故。如是亦名甚深殊勝。</p>
3	<p>【無1】(426c-427a) 釈曰。由是品類方便善巧者，謂諸菩薩(a)悲願相應。後得妙智。(b)行殺生等十種作業，而無有罪等者，(c)謂愛樂善法，(d)憎惡不善，(e)見諸邪性，說名後三。(f)依止此故，行殺等七而無有罪，生無量福，速証菩提。(g)或行前七不起後三。大数言十。(h)或已伏除。為試彼力故心暫起。(i)不能招苦故無有罪。能助道故，生無量福。現行變化身語兩業者，謂依化身發起兩業。或依實身由化心發身語二業。意業無形不可變化。或雖現有貪瞋等事。於化有情無大義利。是故不說。安立有情毘奈耶中者，謂作国王，制諸法律，示行逼惱令住其中。或一切善，能滅衆惡。或大涅槃，滅除生死，名毘奈耶。又現種種諸本生事者，謂諸菩薩諸本生事，化心所現。或久成仏，復示現行，諸本生事。繞益有情，令菩薩學。故後說言，是名菩薩所學尸羅。</p>
4	<p>【断簡・書道博物館】(【無1】に対する注釈) [84行] 釈論中，言「悲願相應，後得妙智」【無1(a)】者，由悲愍■妙智知根，悲惠相應，乃至名善巧故，世親菩薩云【世1(a)】，「謂諸菩薩，若如是知，如是品類，補特伽羅罪，於此不善無間等事，將起加行，以他心智了知彼心，無余方便能轉彼業，如實了知彼由此業定退」</p>
5	<p>【断簡1】(【無1】に対する注釈) [1行-27行] 「善趣定往惡趣。如是知己生如是心。我作此業當墮惡趣。我寧自往必當脫彼。於彼現在雖加少苦。令彼未來多受安樂。是故菩薩譬如良医。以饒益心雖復殺之而無少罪。多生其福。由多福故疾証無上正等菩提。如是等戒最為甚深」【世1(b)】。 問。何故此中，示作無間恐作故，然『涅槃經』中，仙与国王</p>

5

待婆羅門謗方等²⁷，已殺後行殺。答。諸師釈云，五無間業，是定業障，一切受苦，由可一不救，所以未作，即使行殺謗。『經』云，罪是不定業，若捨惡覺，即不受報知，婆羅門命終之後，初生起念，即捨惡覺，生善處故，從彼謗已，然後斷命。

或有釈云，此論拋衆生，不由受苦，方起善心，先有善故，所以未作，即便斷命，乘光勝善，得生善道。彼『涅槃經』，拋衆生，要由處苦，方能起善，又先無勝善，可生善道，所以從彼作已，方然皆由菩薩善知識故，如是不同，二不相違，得說言謗，『經』云，業是不定業，可救故尔。若依大乘，謗方等經，乃重五逆，何得說言，五逆不可釈謗經可救邪，今存後釈。

言「行殺生等十種」【無1(b)】者，下三義釈。初約相似，次■大数，後就実行。

初言「謂諸愛樂善法」【無1(c)】者，似貪欲■。言「增惡不善」【無1(d)】，如似嗔恚。言「見諸邪性」【無1(e)】，見邪是邪，名因邪見。此三善心，即是後三。言「依正此故行殺等七」【無1(f)】者，依此善心，行前七業，無罪有福。

二「或行前七不起後三等」【無1(g)】者，此約大数，以釈実唯有七，是十中数故，総言十。

二「或已伏除等」【無1(h)】者，約実行釈。問，為起実貪嗔等，応是性罪，云何無罪。

答，由先悲恵，引此貪嗔，但除邪見，雖復現行，発身語業，不名為罪，是故釈言，「不能照苦故，無有罪，能助道故，生無量福」。此義，如彼『深密經』説²⁸，「於諸地中所生煩惱，当知，何相何失何得，善男子，無染行相，何以故，是諸菩薩，於初地中，定於一切，諸法々界，已善通達，由此因縁，菩薩要知，方起煩惱，非為不知，是故説名，無染行相，於自身中，不於生苦，故無過失，菩薩生起，如是煩惱，於有情界，能断苦因故」。

通番1は『撰論』本文，通番2と3は『撰論』本文に対応する『世親釈』と『無性釈』である。そして点線で囲んだ通番4が書道博物館所蔵断簡の最後の部分である。ここでは通番2『世親釈』の引用が「謂諸菩薩…定退善趣…」と続く中の「定退」で終わるのに対し，通番5の顧文彬旧蔵本【断簡1】の冒頭は「善趣」から始まっており，両者が結合する。ここから本断簡が書道博物館断簡の連れ本であることが確認できる。そして内容から，

本断簡の注釈対象が通番 3『無性釈』であることがわかる。

(2) 28行から111行：彼修差別分第六

通番 1	<p>【撰論 1】(425c) 論曰。復次凡經幾時修行諸地可得円満。有五補特伽羅。經三無数大劫。謂勝解行補特伽羅經初無数大劫修行円満。清淨増上意樂行補特伽羅及有相行無相行補特伽羅。於前六地及第七地經第二無数大劫修行円満。即此無功用行補特伽羅。從此已上至第十地。經第三無数大劫修行円満。此中有頌</p> <p>清淨増上力 堅固心昇進 名菩薩初修 無数三大劫</p>
2	<p>【無 1】(426a) 釈曰。有五補特伽羅經三無数大劫者。応知唯一補特伽羅位差別故。建立五種。謂後所説勝解行等。勝解行者。未證眞如但依勝解勤修諸行。此經第一無数大劫修行円満。</p>
3	<p>【断簡 2】(【無 1】に対する注釈) [28行-34行] (*前欠) 彼經論皆言,「若從先來²⁹, 善後力等, 数習所成, 名習種姓」。若『仁王經』及『瓔珞經』, 唯就『瑜伽論』等, 習種姓中, 初修習者, 名習種姓, 因習成性後修者, 名性種姓, 道種姓, 此諸經論挹義, 有異立二種姓, 先後不同, 位地差別, 理並無違。 諸師或云, 從十廻向即入初地。或有説言, 依『莊嚴論』, 十廻向後, 更事諸仏, 修決択善, 発方入地。今依後釈, 十廻向満, 未入初地, 別修決択, 後方入地。</p>
4	<p>【無 2】(426a) 清淨増上, 意樂行者。謂^(a)得清淨増上意樂。勤修諸行。^(b)此在六地, 名有相行。在第七地, 名無相行。^(c)如是二種, 補特伽羅。經於第二無数大劫, 修行円満。已上乃至第十地中, 即此転名, 無功用行。經於第三無数大劫修行円満。第八地中, 無功用行, 猶未成満。第九第十地中, 此行方得成満。^(d)此唯是一, 補特伽羅, ^(e)異位相應, 差別成五。</p>
5	<p>【断簡 3】(【無 2】に対する注釈) [34行-62行] 三釈妨難者, 問, 准依『梁論』³⁰, 「願樂行人, 經第一阿僧祇修行円満」, 又云, 「願樂行人, 自有四種, 謂十信十行十廻」。若准彼文, 十廻向満, 尽初僧祇, 其四善根, 既廻向後。以此文証, 四種菩提, 是第二僧祇, 何故前判, 乃云初劫。 答, 准依『梁論』「修時章」説, 其四善根, 配三十以故。『彼</p>

5	<p>論』云³¹,「菩薩道前有四方便,謂十信等,如須陀洹,道前有四方便,所謂煖」等,又准彼文,釈願樂行人此人,未得名清淨意行,人猶既如世第一法,既舉小乘世第一法喻願行人,故知,大乘世第一法,是願行■。又云,無分別智,即是清淨意行,是第二劫,其四善根,既非無分別智,故知非是第二僧祇。</p> <p>言「得淨意樂,勤修諸行」【無 2(a)】者,得出世間,無分別智,相応意樂,依此意樂,■修諸行,名清淨意行,此通十地。</p> <p>言「此在六地,名有相行,在第七地,名無相行」【無 2(b)】,若此前清淨行人,在六地已還,由出觀時,遍計猶■名為有相,第七地中,雖復出觀,所執不觀,名為無相。</p> <p>言「如是二種,經第二劫」【無 2(c)】者,由淨意樂,是其通人。今但揀別,有相無相二種,經第二劫,修行円満言已上,乃至第十地中,即此轉名,無功用行者,即此清淨意樂行人,至八地已上,転前有相無相 (*数文字不詳),功用行,經第三劫修行円満,言第八地中,無功用行 (*数文字不詳),地已得無功用行,猶未成満,言第九地第十地,行方 (*数文字不詳)因行究竟,此行妨満三,「此唯是一」【無 2(d)】等者重明人,云一。「異之相」【無 2(e)】下,拳喻顯,</p> <p>言「如預流等」【無 2】者等,二学果,如小乘中,依此三果,建立五人故。『梁論』云³²,「如須陀■陀含阿那含三位互得制立為五人,說初方便至須陀洹為第一家,為第二斯陀含為第三一種 (数文字不詳)阿那為第五菩薩位亦尔,說初方便至初地為第一位,從二地至七地是第二位,從八地至第十地,為第三位,亦得制立為五人,說初方便,至初地為第一位,從二地至四地為第二位,五地六地為第三位,七地為第四,八地至十地為第五位」。</p> <p>良以,大乘初位,撰前後位,撰後中,撰前後。是故五人三位可撰。今但於此第二位中,分作三人,前離出家々後,雖出種子故,成五人。但由大小三五,是同故,引為喩而非一切。</p>
6	<p>【無 3】(426a)</p> <p>如預流等^(a)從無始來生死流轉。齊何当言三無數劫最初修行。^(b)為答此問故說伽他清淨増上力者。謂^(c)善根力名清淨力。此即說有善根力者。若^(d)大願力名増上力。此意說有大願力者。有善根力故^(e)能降伏所治。有大願力故^(f)常值善知識。^(g)堅固心^(h)昇進者。雖遇惡友方便破壞。終不棄捨大菩提心。⁽ⁱ⁾現世当來所修善法運運增長終無退減。如是若時具善根力及大願力。大菩提心堅固不退。所修善法念念増進不生喜足。順旧而已齊是名為最初修行三無數劫。</p>

【断簡4】（【無3】に対する注釈）[62行-111行]

四別釈頌，先門言「從無始來」【無3(a)】等者，若論虛時，無始已來，即無分齊。若約其行，何相是，初言「為答此」【無3(b)】等者，對問彰頌釈与下釈頌文。亦有解言。若依『梁論』³³，有其四力，謂根力・善願力・心堅力・以進力，依『此論』中，但有三力。今依此論，具有四力亦無■■。先釈上兩句，明其四力。依『瓔珞經』，「十信十心，此四並攝」。初「善根力」【無3(c)】者，以念空惠，三心為體。二「大願力」【無3(d)】者，即是願以，及廻向心，二心為體。「能降伏所治」【無3(e)】者，顯善根力，有治障用，能降伏所治。「常值善知識」【無3(f)】者，顯大願力，有攝善用。三「堅固心」【無3(g)】者，謂信心護心法及戒心三心為體即是初善根力所成故，云雖過惠發方便破壞終不棄捨大菩提心。四「■■進」【無3(h)】者，即是精進心，及不退心，二心為體。是故釈言「現世當來，所修善法，運々增長，終無退減」【無3(i)】。

此十信位，依諸經論，或有說退，或說無退。余師會釈，略以四門分別，一序退，二序不退，三定其所立會釈相違，四釈妨難。

初說退，有二文。一『梁論』「第十勝相」云³⁴，「菩薩在十信位中。修大行未堅固。多厭怖生死。慈悲衆生心猶劣薄。喜欲捨大乘本願修小乘道。故言欲偏行別乘。二依『瓔珞經』云³⁵，「諸善男子。若一劫二劫乃至十劫。修行十信得入十住。是人爾時從初一住至第六住諸仏菩薩善知識所護故。出到第七住常住不退。自在七住已前名為退分，如淨目天子法財才王舍利弗等。欲入第七住。值惡因緣故。退入凡夫不善惡中。不名習種聖人。」

二修不退，有四文。一『此論』云，「堅固心昇進者。雖遇惡友，方便破壞。終不棄捨大菩提心。現世當來所修善法，運々運增長，終無退減」【無3(g)-(i)】。此論意，明十信即為僧祇，云始即得不退。二『起行論』，明十信，名信成就發心云³⁶，「修行信心。經一万劫信心成就故。入正定聚畢竟不退。名住如來種中正因相。未經一万劫。遇惡因緣或便退失墮二乘地」，如後『入王經』言，十千劫行十正道乃當得入習忍位同『起信論』修行信心。經一万劫信心成就以十劫是一万劫故。三『仁王經』上卷，明十信中云³⁷，「習種性十心。一切諸仏菩薩長養十心為聖胎」，下卷中，明十信為習忍云³⁸，「善男子。習忍已前行十善菩薩。有退有進。譬如輕毛隨風東西。是諸菩薩亦復如是。雖以十千劫行十正道發三菩提心乃當入習忍位。亦常學三伏忍法。而不可名字。是名不定人。是定人者入生空位。

7	<p>聖人性故。必不起五逆等」。</p> <p>解云、十信は習種姓故、云習忍、十信已前、行十善、菩薩有退有進、譬如輕毛、雖^{ママ}十方劫行十善道当入十信、即未得入十住已前、仰学十信已上三伏忍法、以進退不定故、不可字名定性菩薩名不定人、十信已上是定人者、学作生空觀、故入生空位、聖人種姓名為聖胎。</p> <p>『華嚴經』明十信偈云、「若信恭敬清淨増、即行堅固不可壞」³⁹「究竟淨心不退轉」⁴⁰。解云、即言不可壞、又云、不退轉故、知十信也。</p> <p>三定其所立会釈相違者、諸經論中、雖有進退、皆有正文、今依後四文、判十信不退。</p> <p>問。前云、二説、当云何通。</p> <p>答。初梁論説退者、若無諸仏、為善知識、十信喜欲、捨大修小、由如來有救済乘業故、十信不退故、『仁王經』云、「諸仏菩薩、長養十信為聖胎」、不明十信有退。二『瓔珞經』云、「七住已前、名為退、分如淨因天子等者、是方便説、非是実退故、『起信論』云、「如修多羅中、或説十信已上、有退墮惡趣」者、非其实退位、為始菩薩未入正位、而懈怠者、恐怖勇健故也。</p> <p>諸師云、十信行位俱退、十解不定。若聖人入者、如利舍弗、第六心退。若凡夫入者、初即不退、若約凡説、十信行位俱退、十解已上、行退位不退、初地已上、行位俱不退。</p> <p>今解、十信已前、行住俱退。故『仁王經』云、「習忍以前、行十善菩薩。有退有進。譬如輕毛隨風東西」。十信已上、行位俱不退。故『此論』云、「所修善法、運々増長終無退減」【無3(i)】。</p> <p>四釈妨難者、問、若十信已上、即行位俱不退者、応名阿毘(以下ナシ)</p>
---	---

本断簡中の「三妨難」(通番5【断簡3】冒頭)、「四別釈頌」(通番7【断簡4】冒頭)にある科文用語から、本断簡が『撰論無性釈』のこの部分を四つ以上に区分していることがわかる。

通番3【断簡2】は通番2『無性釈』の解釈の途中から始まる。通番5【断簡3】は通番4『無性釈』を「三妨難」と科判した部分の注釈である。通番7【断簡4】「四別釈頌」は通番6『無性釈』の注釈であり、本文を解釈した後に十信の退についての議論を行う。そこでは一、序退、二、序

不退，三，定其所立会釈相違，四，釈妨難の四門を設けて議論を行い，結論として十信已前は行位が俱退，十信已上は行位が俱不退という見解を出す。

以上により，本断簡が『華嚴経疏』ではなく玄奘訳『摂大乘論無性釈』に対する注釈であり，書道博物館所蔵本の連れ本であることが証明できた。

5 結語

本稿では，2017年に中国で約3億円で落札された顧文彬旧蔵『華嚴経疏』断簡の伝来と内容について調査を行った。以下，結論を箇条書きで記す。

1. 本断簡の第一の所蔵者は養鷗徹定である。徹定は本断簡を『華嚴経疏』とし，唐代の書写で空海入唐時の将来本とする。徹定が本断簡を『華嚴経疏』と考えたのは，題箋に書かれた「続華嚴経疏」という記録をそのまま受容したためと考えられる。

2. 第二の所蔵者は明治初期に徹定と親交のあった金邠居（金嘉穂）である。彼は徹定から本断簡を譲り受けた。成立については徹定の見解にしたがっている。

3. 第三の所蔵者である顧文彬は同郷の金邠居から本断簡を譲り受けた。顧は成立については徹定，金嘉穂の説に従っているが，本断簡の名称を『続華嚴経疏』とし，具体的な品名まで特定している。その根拠は不明である。

4. 本断簡は全111行からなり，玄奘訳『摂論無性釈』に対する注釈であるが，前半部（1行-27行）と後半部（28行-111行）とでは内容が異なる。前半部は「増上戒学分第七」に対する注釈であり，これは書道博物館所蔵断簡に連続するものである。後半部は，「彼修差別分第六」に対する注釈である。これは錯簡によるものと考えられる。

本断簡が，たとえ『華嚴経疏』でないとしても学術的な価値は失われなない。むしろ従来，学界では報告されていなかった玄奘訳『摂論無性釈』に

対する注釈書であり、翻刻した内容を他文献と比較していくことにより、中国の撰論学派、唯識学派の研究に資することが期待される。

<参考文献>

1. 一次文献

- 「唐人写経巻」(『中賀聖佳 2017 春季芸術品拍卖会』カタログ) 出品番号788
 『華嚴経疏』(磯部彰『中村不折旧蔵西域墨書集成:台東区立書道博物館所蔵』(文部科学省科学研究費特定領域研究<東アジア出版文化の研究>総括班, 二玄社, 2005年)) 中巻 pp.171-172
 顧文彬『過雲樓書画記』(蘇州:顧氏, 1882年)
 世親造, 真諦訳『撰大乘論釈』(大正蔵31)
 世親造, 玄奘訳『撰大乘論釈』(大正蔵31)
 無性造, 玄奘訳『撰大乘論釈』(大正蔵31)

2. 二次文献

2-1 単行本

- 勝呂信静, 下川邊季由『撰大乘論釈世親釈玄奘訳』(『新国訳大蔵経』17 瑜伽・唯識部 11, 大蔵出版, 2007年)

2-2 論文

- 佐藤厚「撰者不詳『撰大乘論無性釈』への注釈書断簡(1) —養鸕徹定旧蔵『華嚴経疏』の実態:書道博物館所蔵—」(専修大学学会『専修人文論集』101号, 2017年)
 町泉寿郎「養鸕徹定と金嘉穂の明治四年, 長崎における筆談記録」(日本漢文学研究編集委員会『日本漢文学研究』4, 2009年)

3 サイト

- ブログ「玲児の近況」「過雲樓書画記と日本」<http://reijiyamashina.sblo.jp/article/178372377.html> (2017年10月11日閲覧)

注

- 1 『中国商报』電子版2017年7月18日付 (<http://www.zgswcn.com/2017/0718/786721.shtml> 2017年11月15日閲覧)「近年来, 每有唐人写经出现在拍卖会上, 都会引起藏家的争相抢购。在不久前举行的中贺圣佳春拍中, 过云楼旧蔵唐人写经卷就经过多番激烈竞价后, 终以1794万元的高价成交, 一举夺得本季春拍桂冠。该经卷纸张质地厚硬, 色已近茶。全卷横164厘米, 纵25厘米。残经部分共111行, 每行在23至25字之间, 共约2500余字。写经内容据文为大乘佛教《续华严经疏》:《释十回向品》以至《阿僧只品》。写经体之源流, 可追溯到两晋和南北朝时期, 北魏时期是佛教文化的兴盛期。到了隋唐,

写经体就更趋于完美成熟。初唐“楷圣”欧阳询，大文学家苏东坡等都会十分赞赏写经文化，认为它们是不可多得的小楷范本。此卷写经之行楷，笔锋遒劲，线条流畅，字体精奇入神，颇有二王之风。墨色浓重如漆，渗透纸背，颇具久远的年代感，经过年长日久的蚕食，此卷得以保留至今。虽是残卷，但在存世稀少的唐人写经之中，品相可称得上是近乎完美。在卷尾附有日本高僧彻定跋与清人金邠居跋，并钤有“古经堂之印”，“彻定珍藏”等印。此卷为金邠居游日时，从彻定处得来的，后此卷又归入过云楼顾文彬之手，著录于《过云楼书画记》。顾氏将其排在所录藏品书类第五件，足见对其的重视。如此难得的一卷写经取得佳绩应该说并不意外。」

2 拙稿「『撰大乘論無性積』への注釈書」断簡（1）—養鸕徹定旧蔵『華嚴經疏』の実態：書道博物館所蔵—」（専修大学人文学会『専修人文論集』101号，2017年）

3 書道博物館所蔵断簡は縦262ミリ，横1237ミリである。本断簡とは縦の長さが一致しないが，理由はわからない。

4 『五教章』『所詮差別』の部分である。この紙裏の部分も書道博物館所蔵本との連続が確認できた。

5 徹定の古写經収集については前掲拙稿 p. 286およびそこに掲げた参考文献を参照。

6 「花嚴經疏零本一卷，唐人無名氏書也。筆法秀拔，精奇入神，頗有二王風。按弘法大師，請來目錄載，新訳花嚴經及花嚴疏，花嚴十会，花嚴会名図，請賢聖文等数部，又按性靈集，大師在唐之日，請越州節度使広求内外典籍，由是考之，此疏大師将来之一，而為彼土名匠手沢可知耳。

万延二年辛酉仲夏，仏眼山竺徹定識。

印 印 」

7 空海『御請來目錄』（大正蔵55・1064a）

8 空海『性靈集』卷5「請越州節度使求内外經書啓」（『性靈集』，日本古典文学大系71，1965年）p. 272

9 前掲拙稿 p. 286参照

10 町泉寿郎「養鸕徹定と金嘉穂の明治四年，長崎における筆談記録」（『日本漢文学研究』4，2009年）

11 「華嚴在積蔵有二，一于闐国沙門実叉難陀訳，一罽賓国沙門般若訳，皆唐外国人經。有李長者疏，此名統疏当非是，是別一人作也。又首尾皆缺，亦不審此為积何品之文，他日得繙大蔵，当自知之。頗疑此卷，是當時作者稿本，流伝日本。故写作行草，而筆意円勁。定公謂近二王，洵非虚也。又謂是唐本，廼弘法大師，入唐求經請帰之本，引捩甚確。案日本撰倭漢三才図会云，大師讃州多度郡屏風浦佐伯直田公之男也，母夢梵僧入懷，妊十二月，宝亀五年生，穎敏甚異世，称神童，幼通六經史伝，從石淵寺勤操受聞持法，博涉三蔵仏經，十九歳剃染，二十歳落髮，二十二歳於東大寺受具足戒，号空海。三十一歳，為求法乗遣唐使船，入唐。明年謁德宗皇帝。觀惠果和尚。惠果曰，來何晚乎。留学三年，三十三歳帰朝。承和二年入定，年六十二。敕贈宏法大師。又日本撰元亨釈書云，玄昉僧正靈龜二年，奉敕入唐，凡二十年，聖武帝天平七年帰朝，以

舶来經論疏章五千余卷，献尚書省，又案日本新刊倭漢年契，宝龜五年乃唐大歷九年，至三十一歲入唐，為貞元二十年。又靈龜二年者，當開元四年，至天平七年，乃二十三年也。定公此卷不定為元昉，而定為宏法所致者，蓋華嚴稍後出，而疏更後，當宏法之時始流布耶，又定公新撰訳場列位華嚴，實又難陀本，天后証聖元年訳，新華嚴般若本，貞元十一年訳，十四年畢，進上，今雖未審作疏何時，亦可約略知之。如宏法請来目錄，已有新華嚴并疏是也。跋云請来目錄並性靈集，日本之著述，今皆未見。万延二年辛酉為皇朝咸豐十年，是年即改文久元年，故年契無万延二年。徹定，日本僧也，字松翁，學通儒釈。余曾識其人，稱為定公，歎是今日讀寧惟淨，一流著述，頗富。所見板行者凡數種，曰古経題跋，曰訳場列位，曰釈教正謬初破再破，篋藏古経極夥，其最為神品無上者，一則唐咸亨四年，章武郡公蘇慶節為父邢国公定方写造之大樓炭経，白麻紙如新，墨濃如漆，細楷精妙，一則西魏大統十六年，陶作虎写造之菩薩処胎経，尾附願文，麻紙（南北朝紙旧無名目，今以此経紙，与唐相似，而愈古。遂引趙松雪跋洛神云，晋時麻箋之例，曰麻紙云）精古作老黃色，字大如豆，書法逼真，北碑一派，而筆意自如，無石刻方拙之態，所謂甞裘氣者，其超能入聖之處，實有不可思議之妙。余曾為之題跋，所見古写本近十許種。故定公，以此卷並福田経簡為潤筆。西魏墨迹，廼世間絶無之寶，不囹東夷尚有存者，因述得之，所自購藏弄之人，而牽連及之，使覽是卷者，知世有北朝真迹，豈不愉快無極。

同治十一年壬申十二月郊居金嘉采記 印 印

12 寺島良安『倭漢三才図会』卷76

13 虎関師鍊『元亨釈書』卷16

14 『倭漢年契』は浅野高蔵が作成した日本と中国の対照年表である。

15 『訳場列位』「大方広仏華嚴経八十卷／証聖元年三月十四日 於東都大内大遍空寺訳于闐国三蔵実又難陀／天后自運仏毫首題名／（＊訳者名省略）」，「大方広仏華嚴経四十卷／貞元十一年十一月十八日進奉梵夾十二年六月五日奉詔於長安崇福寺訳十四年二十四日訳畢竟進上（＊訳者名省略）」

16 町前掲論文，p. 107

17 町前掲論文，p. 108

18 町前掲論文，p. 109

19 町前掲論文，p. 110

20 町前掲論文，p. 111

21 「続華嚴経疏跋」右続芭嚴疏，日本高野大師書，細草如豆類，宛有右軍風格。惜僅此一巻，首尾俱闕，為可恨耳。夫古墨伝留，難必其全身，以得隴望蜀之心，管中窺豹之遇，々已幸矣。□□町前掲論文，p. 125

22 『中賀聖佳 2017 春季芸術品拍売会』カタログ「唐人写経」の解説

23 筆談の中で徹定が金に「友人中最親者が誰。」と尋ねたのに対して金は「一 姓願，蘇州人，専為鑑藏宋元名蹟。」と答えている。（前掲町前論文 p. 117）これが願文彬を指すと考えられる。

24 顧文彬「唐写統花嚴經疏殘本，据文当为积十回向品以至阿僧祇品。余從同郡金君芷衫得之。金君游日本，從仏眼山僧徹定得之。徹定謂是唐本，引弘法大師請来目錄載新訳花嚴經及花嚴疏，又性靈集，大師在唐之時，請越州節度使広求内外典籍為証。金君又引倭漢三才図会云，大師讃州多度郡，屏風浦佐伯直田公之男也。母夢梵僧入怀，妊十二月，宝亀五年生，幼通六經史伝，從石淵寺勤操受聞持法，博涉三藏仏經，十九歳剃染，二十歳落髮，二十二歳于東大寺受具足戒，号空海，三十一歳為求法乘遣唐使船入唐，明年謁德宗皇帝，觀恵果和尚，恵果曰，来何晚乎，留学三年，三十三歳帰朝，承和二年入定，年六十二，敕贈弘法大師。考倭漢年契，宝亀五年乃唐大歴九年，至三十一歳入唐為貞元二十年，又徹定新撰訳場列位新花嚴般若本，貞元十一年訳，十四年畢，進上。雖未審疏作于何時，当在二十年之前。觀弘法請来目錄，已有新花嚴并疏可知。余按据金君与徹定考定統花嚴經疏，唐時由中国請至日本，今仍由日本還諸中国，使中国今日得見唐時卷子本制度，善一。且知唐時釈部亦是單疏本与経別行，善二。又唐時釈澄観花嚴經疏鈔会本二百二十卷，尚存大藏，今得経生写本，足以校其同異，善三。而書法之円勁古厚，是為右軍大令血胤，猶不与焉。然則是疏，為我中国之瑰宝，淪入日本千餘年矣，一旦来帰，歓喜无量，詎能以殘本少之哉。」（『過雲樓書画記』卷一）

25 『大方広仏華嚴經疏鈔会本』220巻が『乾隆版大藏經』第575から596に収録されている。

26 経生の説明は次の通り。「経生書一般指抄写仏經的人用的書体。在経生書中，有的淵源有序，頗具功力。但有的抄經者為求清楚端正，多写的呆滯而無神韻，所以后世有人讥讽呆板無神的小楷為“経生書”。唐代仏教盛行，信徒多以仏經敬奉，仏經多以端正工穩的小楷手抄而成，抄写仏經的人被称为“経生”，其字则称为“経生書”。这类手抄的経卷，在書法上亦有较高的水准，反映了唐代書法艺术已相当普及。但后人褒称之“経生書”，則含有貶意。経生書继承了章程書的嫡統的，而章程書即是后世所谓的真書。從書法的角度来看，在欧阳修那个时代，是很推崇経生書的，可以列入神品。但是他们也有毛病，写的太多，太熟练，所以就拘于成法，没有了生气。」（参考資料：周俊杰，書法知識千題：河南美術出版社，1991年7月）

27 曇無讖訳『大般涅槃経卷』第十二，聖行品第七之二「善哉善哉。如汝所説。我念往昔於此閻浮提作大國王。名曰仙頂。愛念敬重大乘經典。其心純善無有僞惡嫉妬慳慳。口常宣説愛語善語。身常攝護貧窮孤獨。布施精進無有休廢。時世無仏声聞緣覺。我於爾時愛樂大乘方等經典。十二年中事娑羅門供給所須。過十二年施安已訖。即作是言。師等今応發阿耨多羅三藐三菩提心。娑羅門言。大王。菩提之性は無所有。大乘經典亦復如是。大王。云何乃令人物同於虛空。善男子。我於爾時心重大乘。聞娑羅門誹謗方等。聞已即時断其命根。善男子。以是因縁從是已來不墮地獄。善男子。擁護攝持大乘經典。乃有如如是無量勢力。」（大正蔵12・434c）

28 玄奘訳『解深密経』卷四「世尊。是諸菩薩於諸地中所生煩惱。当知何相何失何徳。仏告観自在菩薩曰。善男子。無染汚相。何以故。是諸菩薩於初地中定。於一切諸法法

界已善通達。由此因緣菩薩要知。方起煩惱非為不知。是故說名無染汚相。於自身中不能生苦故。無過失菩薩生起如是煩惱。於有情界能斷苦因。是故彼有無量功德。」(大正藏16・708a)

- 29 曇無讖訳『菩薩地持經』卷一「爾是名性種性習種性者若從先來修善所得是名習種性」(大正藏30・888b)

- 30 真諦訳『撰大乘論世親釈』卷十一「釈曰。何等為五。一有一人。謂願樂行人。二有三人。謂清淨意行人有相行人無相行人。三有一人。謂無功用行人。是名五人。願樂行人自有四種。謂十信十解十行十迴向。為菩薩聖道有四種方便。故有四人。如須陀洹道前有四種方便。此四人名願樂行地。於第一阿僧祇劫。修行得円滿。此地若已円滿。此觀行人。未得清淨意。行以未証真如。未得無分別智。故無分別智即。是清淨意行。又猶同二乘心故。非清淨意行。又未至菩薩不退位。」(大正藏31・229b)

- 31 同前

- 32 真諦訳『撰大乘論世親釈』卷十一「譬如須陀洹斯陀含阿那含三位製立為五人。若三位云何製立為五人。由位差別故成五人。從初方便至須陀洹為第一人。家家為第二人。斯陀含為第三人。一種子為第四人。阿那含為第五人。菩薩位亦爾。初地為第一位。從二地至七地為第二位。從第八地至第十地為第三位。亦得製立為五人。從方便至初地為第一人。從二地至四地為第二人。五地至六地為第三人。七地為第四人。八地至十地為第五人。」(大正藏31・229c-230a)

- 33 真諦訳『撰大乘論世親釈』卷十一「論曰。心堅進増上 釈曰。由事善知識不捨菩提心。生生及現世恒増長善根。無復減失論曰。三種阿僧祇。說正行成就 釈曰。若具善根力善願力。心堅増上四義。以此時為阿僧祇之始。諸師說不同故。有三種。經如此阿僧祇時。說修正行得成就」(大正藏31・232a)

- 34 真諦訳『撰大乘論世親釈』卷十五「菩薩在十信位中。修大行未堅固。多厭怖生死。慈悲衆生心猶劣薄。喜欲捨大乘本願修小乘道。故言欲偏行別乘。」(大正藏31・265a)

- 35 竺仏念訳『菩薩瓔珞本業經』卷上「諸善男子。若一劫二劫乃至十劫。修行十信得入十住。是人爾時從初一住至第六住中。若修第六般若波羅蜜。正觀現在前。復值諸仏菩薩知識所護故。出到第七住常住不退。自此七住以前名為退分。仏子。若不退者。入第六般若修行。於空無我人主者。畢竟無生必入定位。仏子。若不值善知識者。若一劫二劫乃至十劫。退菩提心。如我初會衆中有八万人退。如淨目天子法才王子舍利弗等。欲入第七住。其中值惡因緣故。退入凡夫不善惡中。不名習種性人。」(大正藏24・1014c)

- 36 馬鳴造 真諦訳『大乘起信論』「信成就發心者。依何等人修何等行。得信成就堪能發心。所謂依不定聚衆生。有熏習善根力故。信業果報能起十善。厭生死苦欲求無上菩提。得值諸仏親承供養修行信心。經一万劫信心成就故。諸仏菩薩教令發心。或以大悲故能自發心。或因正法欲滅。以護法因緣能自發心。如是信心成就得發心者。入正定聚畢竟不退。名住如來種中正因相應。若有衆生善根微少。久遠已來煩惱深厚。雖值於仏亦得供養。然起人天種子。或起二乘種子。設有求大乘者。根則不定若進若退或有供養諸仏。未經一万劫。於中遇緣亦有發心。所謂見仏色相而發其心。或因供養衆僧而發其

心。或因二乘之人教令發心。或学他發心。如是等發心悉皆不定。遇惡因緣或便退失墮二乘地。」(大正藏32・580bc)

37 鳩摩羅什訳『仏説仁王般若波羅蜜經』卷上「善男子初發想信。恒河沙衆生修行伏忍。於三寶中生習種性十心。信心精進心念心慧心定心施心戒心護心願心迴向心。是為菩薩能少分化衆生。已超過二乘一切善地。一切諸仏菩薩長養十心為聖胎也。」(大正藏8・826b)

38 鳩摩羅什訳『仏説仁王般若波羅蜜經』卷下「三業同戒同見同学。行八万四千波羅蜜道。善男子。習忍以前行十善菩薩。有退有進。譬如輕毛隨風東西。是諸菩薩亦復如是。雖以十千劫行十正道發三菩提心乃当入習忍位。亦常学三伏忍法。而不可名字。是不定人。是定人者入生空位。聖人性故。必不起五逆六重二十八輕。仏法經書作返逆罪言非仏説無有是處。能以一阿僧祇劫。修伏道忍行。始得入僧伽陀位。」(大正藏8・831b)

39 仏駄跋陀羅訳『華嚴經』卷六，賢首菩薩品 (大正藏9・433b)

40 仏駄跋陀羅訳『華嚴經』卷八，菩薩雲集妙勝殿上説偈品 (大正藏9・448c)